

Catholic Tokyo Volunteer Center

許されざる
命
の物語

ドキュメンタリー映画
【完全字幕版】

被ばく牛と生きる

経済価値がないと言われた家畜の“いのち”の重さとは……
存在が許されない被ばく牛と
その命を守る農家たちの5年間の記録！



■現状報告■

幸田和生司教 (CTVC責任者)

- 映画上映と現状報告会 -

日時: 2018年10月20日(土)

会場: 幼きイエス会ニコラ・バレハウス
9階ホール

- 午後2時から4時30分(午後1時30分開場)
- 入場無料(当日会場にて募金箱を設置いたします)
- 定員100名(要事前申し込み)
※裏面CTVC事務局までご連絡ください。当日参加も受け付けます。
- パソコン要約筆記あり

あなたは経済価値が無いからと言って、被ばく牛の殺処分にご同意できますか？

原発事故から2か月後、国は“警戒区域内にいる全ての家畜を殺処分する”指示を出す。避難を強いられる農家は、涙を飲んで殺処分に応じるしかなかった。しかし国の方針に逆らい、少数の畜産農家が被ばく牛を生かそうと決意。住んではならない警戒区域の中に住み、また数十キロ離れた避難先の仮設住宅から通い、被ばくした牛の世話を続けている。被ばく牛を生かす唯一の道、「大型動物による世界初の低線量被曝研究」…国策による事故でありながら、国は人類にとって必要なこの研究から手を引いていく。事故翌年、牛に原因不明の白斑が出現。大学研究者は原因を調べるも、被曝との因果関係を立証するには、さらに数年の時間がかかると言う。国からの支援もなく、故郷も仕事も奪われながらも、経済価値のない牛を生かし続ける畜産農家の心情を5年間にわたって丁寧に記録した作品です。

被ばく牛を生かし続ける農家の群像を描いた問題作

吉沢正巳さん

南相馬市と浪江町にまたがる牧場で300頭以上の被ばく牛を生かし続ける。被ばく牛は原発事故の生き証人との考えから、牧場名を「希望の牧場」に変えた。日本全国、宣伝カーに乗り、原発事故の悲惨さを訴えている。



山本幸男さん

30年以上浪江町の町会議員を務め、原発を推進してきた有力者。牛を生かすことは故郷を守ることに通じるとの信念を持ち、避難先の二本松市から浪江町の牧場に引っ越している。



池田光秀さん

原発の立地村・大熊町で5代目となる畜産農家。小規模経営のため、平日はサラリーマンとして働く光秀さん。賠償金を取り崩し、牛の餌代に充ててきた。夫婦で愛情深く牛を育ててきただけに、殺処分には断固反対している。



柴開一さん

浪江町の中でも最も放射線量が高い地区にある牧場主。50年近く牛と共に暮らしてきたが、柴牧場の隣の空き地が汚染物の仮置き場に指定されたため、重大な決断をすることに…。



監督・編集：松原 保

プロデューサー：榛葉 健

製作：パワーアイ / 2016/104分/カラー/16:9

幼きイエス会ニコラ・バレハウス
〒102-0085 東京都千代田区六番町14-4
JR 中央線・総武線/東京メトロ 丸ノ内線・南北線
四ツ谷駅下車 (麴町出口より徒歩1分)
※イベントに関するお問い合わせはCTVCまでお願いいたします。

■ 駐車スペースがございませんので、公共交通機関をご利用ください。 ■



CTVC-カトリック東京ボランティアセンター
〒106-0032 東京都港区六本木4-2-39
電話 03-6721-1421 FAX 03-6721-1422
E-mail tokyo@ctvc.jp HP <http://ctvc.jp>

